



2024

11/2 (土) 12:20 ~ 13:10

第4会場 名古屋コンベンションホール
(4F 中会議室 409)



アトピー性皮膚炎

- 正しい評価に基づいた新たな治療戦略 -

座長

海老澤 元宏 先生

国立病院機構相模原病院臨床研究センター長

演者

小林 茂俊 先生

帝京大学医学部小児科 教授 / アレルギーセンター長

本セミナーは、整理券制です。

■配布場所：名古屋コンベンションホール 2階ロビー

■配布時間：当日 8:30~11:50

※整理券はセミナー開始と同時に無効となりますので、ご注意ください。

共催

第61回日本小児アレルギー学会学術大会

株式会社 シンテスト

アトピー性皮膚炎

- 正しい評価に基づいた新たな治療戦略 -

小林 茂俊 先生

帝京大学医学部小児科 教授 / アレルギーセンター長

ステロイド外用薬が初めて用いられたのは1950年代である。その後1999年にタクロリムス外用薬が発売されたが、2018年のデュピルマブの登場に至るまで新規アトピー性皮膚炎（AD）治療薬は長らく登場してこなかった。ここ数年間で状況は一変し、抗体医薬、Janus Kinase（JAK）阻害薬、Phosphodiesterase（PDE）4阻害薬、Aryl hydrocarbon receptor（AhR）モジュレーターなどが次々と開発され、新規薬剤のラッシュとなっている。これら新薬が小児に適応拡大されることによって小児ADの治療は大きな変革を遂げつつある。選択肢が増えたことは喜ばしいが、一方で医師には、新薬の作用機序、適応、使用方法、副作用などについて正確に理解し、適切に選択することが求められるようになっている。

また、基本となる外用薬の正しい選択と塗り方、スキンケア、増悪因子回避、アドヒアランス維持、患者指導などは今も重要であり、軽視してはいけない。最新治療をバランスよく取り入れつつ、基本に忠実なアプローチを維持することで、ADの長期的な寛解を達成できると考える。新旧どちらの治療においても欠かせないのがAD患者の皮膚の状態の正確な評価である。一般的にADの重症度は、皮疹の性状や面積、かゆみの程度など臨床症状に基づいて決定される。国際的な評価指標であるEczema Area and Severity Index（EASI）やSeverity Scoring of Atopic Dermatitis（SCORAD）などは全身の詳細な診察が必要であり、医師のスキルと時間を要する。Investigator's Global Assessment（IGA）やNumerical Rating Scale（NRS）は簡便であるが、客観性には限界がある。

より客観的な血清バイオマーカーとしてThymus and activation-regulated chemokine（TARC）やSquamous cell carcinoma antigen（SCCA）2は、診断や重症度評価、コントロール判定の参考になる指標として有用で、臨床現場で広く活用されているが、採血が必要なため年少児では頻繁に行うのは難しい。実際には、これらの方法を組み合わせて総合的に評価を行う必要がある。本セミナーでは、小児のADの最新治療について概説するとともに、TARC、SCCA2の特徴や意義について解説する。また、われわれが行っているスマートウォッチを用いた小児AD患者における搔破運動の客観的評価についても触れる。